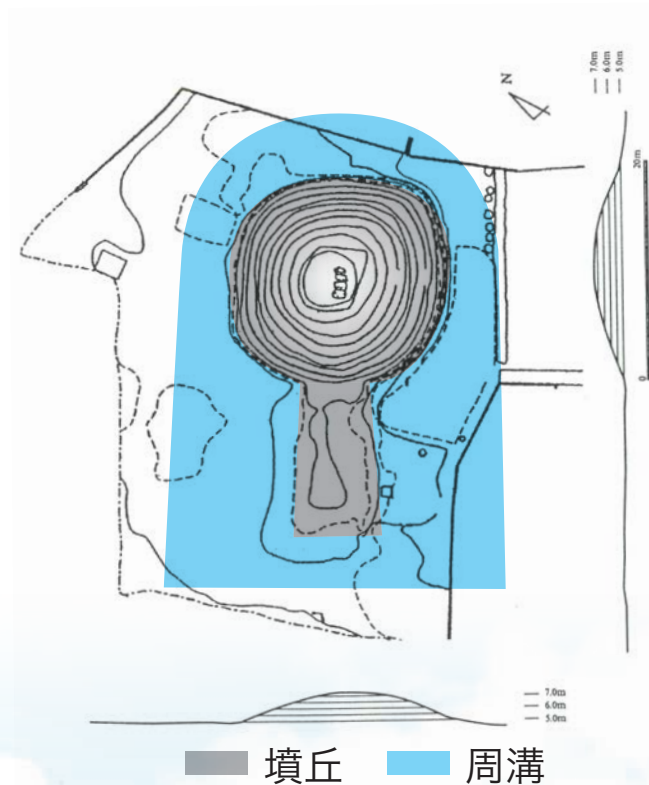


下里古墳からわかること



出土品



那智勝浦町文化協会創立20周年記念文化講演会記念誌

下里古墳からわかること

那智勝浦町文化協会

創立 20 周年記念誌の発行にあたって

那智勝浦町文化協会は、2018（平成 30）年 11 月に創立 20 周年を迎えました。この記念の年に、南紀熊野の財産でもある下里古墳に焦点をあてて、古代の熊野を改めて味わい直そうと考えて、「下里古墳からわかること」という記念文化講演会を開催いたしました。この記念文化講演会を開催するにあたり、平成の時代に行われた 2 回にわたる発掘調査を指導された橿原考古学研究所所長の菅谷文則先生（故人）のご推薦によりまして、日本の古墳研究の第一線で成果を上げられている、岡山大学大学院の清家章先生を講師にお迎えすることができました。

南紀熊野には、古墳としてはよく知られた仁徳天皇陵よりも古い、前方後円墳である下里古墳があります。卑弥呼の時代から 120 年後くらいに造営された前方後円墳です。このように古墳時代の早い段階で、南紀熊野の太田川河口部に前方後円墳が造営されたことは、何を物語っているのでしょうか。

那智勝浦教育委員会が調査主体となり、1972（昭和 47）年に第一次発掘調査が行われ、報告書が発行されました。このころは、人々の関心が高まったようです。その後、2000（平成 12）年に第二次発掘調査、2005（平成 17）年に第三次発掘調査が行われましたが、残念なことに、これらの調査成果は現地説明会や報告書などを通して、研究者のみならず一般の皆様方にも還元されることはなく、今日にいたっております。

近年、地域の魅力発信として、地域の歴史や文化を取り上げることが、盛んになってまいりました。ただ、必ずしも妥当でないことに、焦点があてられる例もみられます。そこで、南紀熊野の古代の姿を、深くじっくりと学ぶ機会にしたいと考えて、この記念文化講演会を企画いたしました。

おかげさまで「下里古墳からわかること」の記念文化講演会は、とても分かりやすかったと大好評を得ました。そこで、この記念文化講演会を記録として残すとともに、聴講できなかった皆様方にも、広く知っていただく機会といたしたく、創立 20 周年記念誌として発行することになった次第です。

那智勝浦町文化協会は、創立 20 周年と申しましても、まだまだ歴史の浅い団体でございます。これからも那智勝浦町の文化活動の普及・推進、ならびに文化の向上に寄与することをめざしてまいります。引き続き、皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和 2 年 9 月 30 日

那智勝浦町文化協会
会長 後 誠 介

講師の紹介

清家 章 教授

岡山大学大学院社会文化科学研究科
埋蔵文化財調査研究センター調査研究室長



■プロフィール

古墳時代の親族構造、特に人骨・副葬品・埋葬施設から当時の親族のあり方について、あるいは古墳時代の王権や首長研究に取り組んでおられます。古墳時代は、国家形成期あるいは初期国家であるとの考え方があり、国家の成り立ちをテーマにして研究を進めておられます。

■研究テーマ：原始～古代の親族構造論

古墳時代政治史

中四国の横穴式石室の研究

円筒埴輪の研究

■主な著書

『古墳時代の埋葬原理と親族構造』

大阪大学出版会 2010年

『卑弥呼と女性首長』

学生社 2015年

『埋葬からみた古墳時代 女性・親族・王権』

吉川弘文館 2018年

『卑弥呼と女性首長』新装版

吉川弘文館 2020年

下里古墳からわかること

岡山大学大学院社会文化科学研究科

教授 清 家 章

1 はじめに

皆さんこんにちは。まずは那智勝浦町文化協会創立20周年おめでとうございます。また、今年は台風や大雨で被害に遭われた方もいらっしゃると思いますが、その方にはお見舞い申し上げます。

今日お話しすることは、主として3つです。1つは、下里古墳がどのような内容を持つ古墳かということをお話申し上げます。

2つ目は、後（うしろ）会長からお話がありましたとおり、なぜ下里古墳が那智勝浦に造られたのかということをお話しします。結論から先に言いますと、ヤマト政権との強いつながりの中で、ヤマト政権の政策と地元の欲求というものがおそらく合致して造られたのではないかと、そういうお話をいたします。

最後に、その議論を補強するために、少し離れますけれども、田辺市磯間岩陰遺跡のお話を少ししたいと思います。全く関係ないわけではなくて、下里古墳の性格を考えると、たいへん参考になるものなので、その話をしていきたいと思っています。

この3点を今日お話ししたいと思っています。

(以下、スライドを上映しながら)

まず、古墳時代とはどんな時代かという話をしたいと思います。

日本列島に人類が住み始めるのは、旧石器時代です。すなわち3～4万年ごろに人が住み始めるわけです。

つぎに1万5000年前くらいに縄文時代が始まりました。縄文時代という時代は、木の実を採集し、イノシシやシカを狩る、いわゆる狩猟採集の社会です。それが約1万数千年続きまして、紀元前1000年、あるいは紀元前800年頃から、弥生時代が始まります。

いま我々もたくさんお米を食べているわけですが、弥生時代は稲作が始まる社会です。稲作を行うわけですから、定住が始まります。ずっと同じ場所に住み続ける定住社会になります。それまでは移動社会だったのですね。

弥生時代が進みますと、集団が統合されていきました。やがて大きな集団が古墳を造り始める。古墳時代という時代に突入をするわけです。

そしてその古墳時代の次には、奈良時代となります。奈良時代は、法律や統治機構が整えられた本格的な古代国家であると理解されています。

弥生時代と、この本格的な国家の間に挟まれた時代、それが古墳時代と言われる時代です。

私の師匠である都出比呂志（つでひろし）先生は、古墳時代を「初期国家」とおっしゃっていて、国家の原初的な形態であると言っています（都出 1991）。「日本の国はいつから始まりますか」と聞かれたときに、考古学から見ると、このあたりから国家としての形が整い始めたということになります。完全な国家ではないけれども、原初的な国家、国としてのまとまりが生まれたのが、古墳時代ということです。下里古墳は、この古墳時代に属するわけです。西暦 260 年くらいから 680 年くらいまでの間を古墳時代と呼びます。

どのような社会かと申しますと、かなり階層差がはっきり分かれていた社会だと考えられます。

図 1 は、都出先生が作られた図です。一番左上が大王陵ですね、200 メートルから一番大きなものは大仙陵古墳とあって 500 メートルを超える大前方後円墳です。

中堅の首長クラスは数十メートルから 100 メートルくらいの古墳を造っていて真ん中左側のランクの古墳がある。

下位層の人びとはマウンドを持たない墓で、地面に穴を掘って埋める。土坑墓（どこうぼ）と言います。地位というものが墳墓の大きさ、あるいは形で表現される社会が、古墳時代だったわけです。

ちなみに、下里古墳は現地に行くと芝生を張られてきれいになっていますが、もともとは異なる姿を見せていました。

写真 1 は兵庫県神戸市の西端にある五色塚（ごしきづか）古墳です。淡路島が見えていて、写真の右側に明石大橋があります。

全長 190 メートルの大前方後円墳なのですが、木が生えているわけではなく、芝生もなく、葺石といって、手のひらサイズより少し大きい石を斜面に貼り付けています。非常に幾何学的な、シンメトリーな形をしたものが、古墳の本来の姿です。

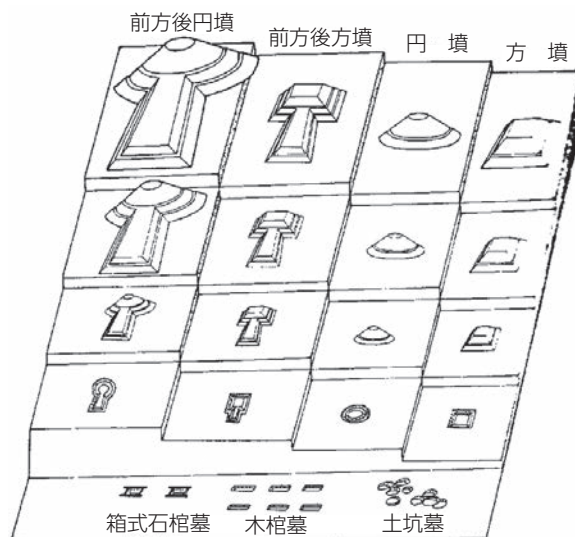


図 1：古墳の序列（都出編 1989）



写真 1：五色塚古墳（兵庫県神戸市）
（神戸市教育委員会 2006）

古墳は森のように見える写真が多くありますが、造られた当時は木がなくて、先ほど見たようなシンメトリックな形をしているというふうにご想像ください。これは今日の話でも重要になります。

図2は、近畿の中でも王陵クラスの大型の古墳の時期を示したものです。上が古くて下が新しい。なにしろ古墳時代というのは、西暦260年から680年くらいまで400年くらい続くものですから、古いものと新しいものを分けているのです。

だいたい西暦260年から370年くらいまでを前期、370年くらいから500年までを中期、500年から600年くらいまでを後期といいます。600年以降は省いていますけれども、600年から680年くらいまでを終末期と言ったりします。

下里古墳はいつくらいの古墳か。結論から先に言いますと、おそらく4世紀中頃から後葉くらいの古墳かと考えています。昔は「中期古墳だ」という人もいたのですが、今日これからお話ししますように、前期古墳だと考えています。

前方後円墳とか古墳というと、すぐ奈良とか大阪というふうに思うわけですが、決してそういうわけではありません。北は岩手県から、南は鹿児島の大隅半島の南端まで、前方後円墳というのは各地に点在しています。(図3)

下里古墳がどうして重要か。その1つは、本州の最南端にあるということです。前方後円墳の分布で見ますと、もちろん九州は南にありますけれども、本州では最南端にある前方後円墳が下里古墳とい

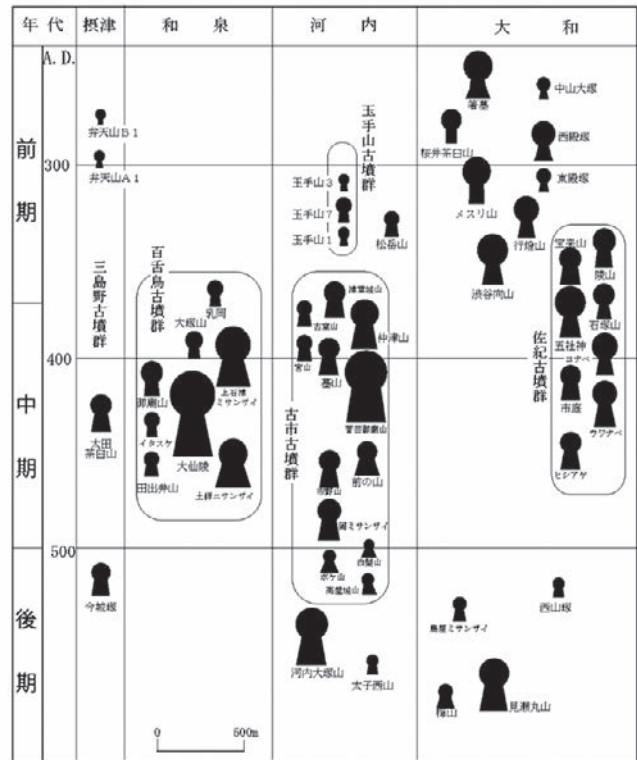


図2：近畿の大型古墳の時期 (清家 2018)



図3：全国にある前方後円墳 (小野ほか編 1992)

うことなのです。これはとても注目に値することです。そして、それは国史跡になる1つの重要な要件なのです。

墳形が前方後円墳であることには意味があります。奈良あるいは大阪に大きな前方後円墳が造られて、そこにヤマト政権の本拠地があります。そしてその政権と関係を結んだ地域、あるいは集団が、前方後円墳を造っていると考えられているのです。

振り返ってみますと弥生時代までは、九州とヤマトはあまり交流が盛んではありませんでした。弥生時代の後期から交流が始まっていくのです。古墳時代になると、岩手県の人でも前方後円墳を造るし、あるいは鹿児島県の人でも前方後円墳を造るし、四国の人でも前方後円墳を造ります。あるいはこの下里の人たちも前方後円墳を造ったことがある。このように、沖縄と東北北部・北海道を除いて全国どこでも前方後円墳が見られます。1つの同じ文化圏の中に属している様子が見て取れる。

こうしたところから、日本列島が1つの大きなまとまりとなっていると考えられています。そしてその中心が大阪と奈良にあって、大阪、奈良にいる大王と、地方の首長たちが互いに関係を結んで、1つの大きなまとまりをつくっている。だから各地の前方後円墳の存在は日本の国としてのまとまりが生まれ始めたことを示しているのではないかと理解されています。

Ⅱ. 下里古墳の特徴

(1) 墳丘・周溝・葺石

さて、ようやく下里古墳の話に移ります。下里古墳の現地に行きますと、後円部の部分は高まりがあるのですが、前方部が非常に低くて、しかも後円部、円形のところに鉄柵が打ってあって、「よく円墳と間違えられる」とうかがいました。ですが発掘の結果、これは前方後円墳であることが確定しています。前方後円墳であるということに意味があります。

全長が40メートルということになっています。その周囲には、浅いですが周溝(しゅうこう)という溝が巡っています。その周溝の長さを入れると50メートルという調査結果になっています。

40メートルというのは、古墳における1つの基準的な大きさです。昔の長さの単位には尺・歩(ぶ)があるのですが、歩というのは、2歩歩いたのが1歩です。だいたい1.4メートルと考えられます。だからこれは、おそらく30歩(ぶ)の規格で造られていると考えられています。30歩(ぶ)というのは古墳の1つの格です。

40メートルくらいの前方後円墳というのは、私は一度計算をしたことがあるのですが、河川の一流域にある小さな平野部の人たちが一冬で造れるくらいの規模の墳丘(ふんきゅう)です。

図4は、1975年に作製された図面を使っていますので、周溝の形が、盾形周溝といって逆「U」字形をしています。2000年の調査による復元図を見ますと、前方後円形の形に沿って、くびれ部に対応する部分が少しへこんで外に出るように描かれています。これも重要なことで、ここからも時期がわかります。

盾形周溝ならばそれは中期古墳の特徴です。くびれ部に相当する部分がへこんで、古墳と相似形をしている周溝は前期古墳の1つの特徴なので、下里古墳はやはり前期古墳でよいと思います。

この墳丘には葺石といって石が貼り付けられていたこともわかっています。これも重要なことです。私は葺石を今までたくさん掘ったことがありますけれども、写真等を見ている限りしっかりした造りになっていて、ヤマト政権から情報が伝わっているということが理解できます。

葺石（ふきいし）は、古いところでは最初は垂直に積んで、それから斜めに積んでいくのです。ただこれは下からずっと斜めに積んでいるところをみますと、一番古い葺石の積み方ではなくて、前期でも後半の積み方だということも見てとれます。

今日現地に行ってきた写真2を早速みてみましょう。後円部が非常に目立っております。後円部から前方部を覗くと、前方部は非常に低いですが、元々はこんなに低くはなかったはず。報告書や先ほどお伺いしたところによりますと、ミカン畑にもなっていたということですので、おそらく畑にされるときに土が削られて、前方部が低くなっただけで、おそらくもっと高い前方部があったと考えられます。

現地に行きますと、竪穴式石室の天井石が見ることができます。後円部の墳頂には竪穴式石室が1つ見つかっている。ここに人が埋葬されていたということなのですが、その天井石を後円部の一番上で見ることができます。

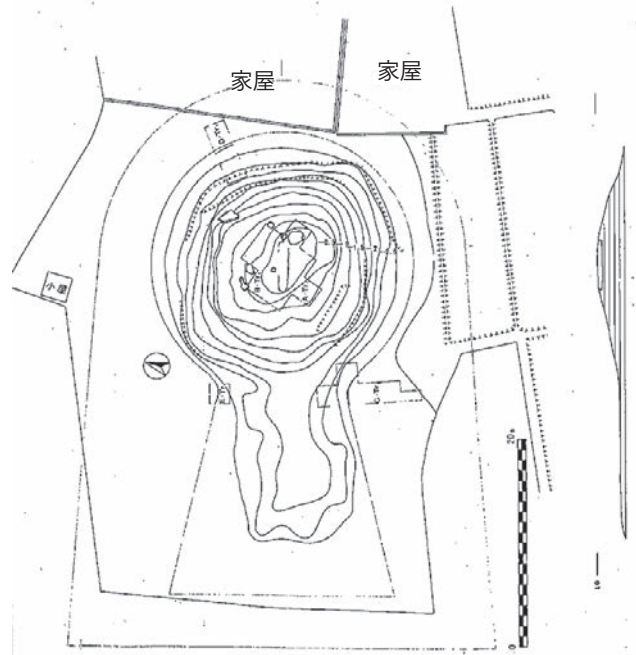


図4：下里古墳（那智勝浦町教育委員会 1975）



写真2：下里古墳の後円部（2018年10月）

(2) 竪穴式石室

天井石はなかなか見ることができないものです。竪穴式石室は、いったん掘ってしまうとすぐ埋め戻しされて、天井石を見ることのできる古墳はそんなに多くないのです。石が見えるだけでも私は大興奮です。

その竪穴式石室も、1975年の報告書に発掘調査の記録が報告されています(図5)。長さが5メートル35センチあります。非常に長いですね。幅は、東側が95センチ、西側が65センチあります。石室が東西方向に向いているということです。東側が広いので被葬者の頭位はおそらく東を向いていたと考えられます。

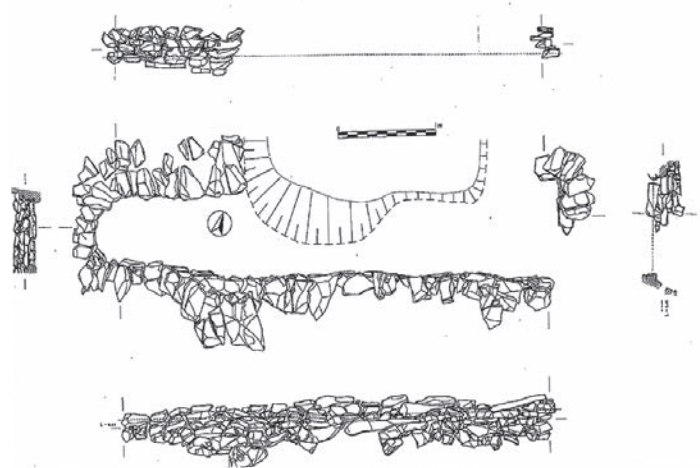


図5：下里古墳石室(那智勝浦町教育委員会 1975)

5メートルの石室はなかなか立派です。4メートルを超えると大型石室というふうに呼びますので、大型の石室です。40メートルの前方後円墳にしてはかなり立派な石室が入っているイメージですね。東西方向に石室があるというのも重要です。

こうした石室から、何が読み取れるでしょうか。まず、遺体の頭を向ける方向にはすごく意味があります。

図6の縦線の範囲では、北枕で人を納めます。点線の範囲、つまり四国から九州の北部というのは、点線になっていますが、これは東西に石室を向ける地域なのです。東枕の場合と西枕の場合があるのですが、東西に石室を向ける地域なのです。

ヤマト政権の中樞はどちらかというとな南北が好きで、大阪・奈良の竪穴石室を掘ると、たいがい北を向きます。四国の前期古墳を掘りますと、石室はたいがい東西に向けています。下里古墳は東枕だったので、これは四国の影響をどうやら受けているらしいということがここから見えてきます。

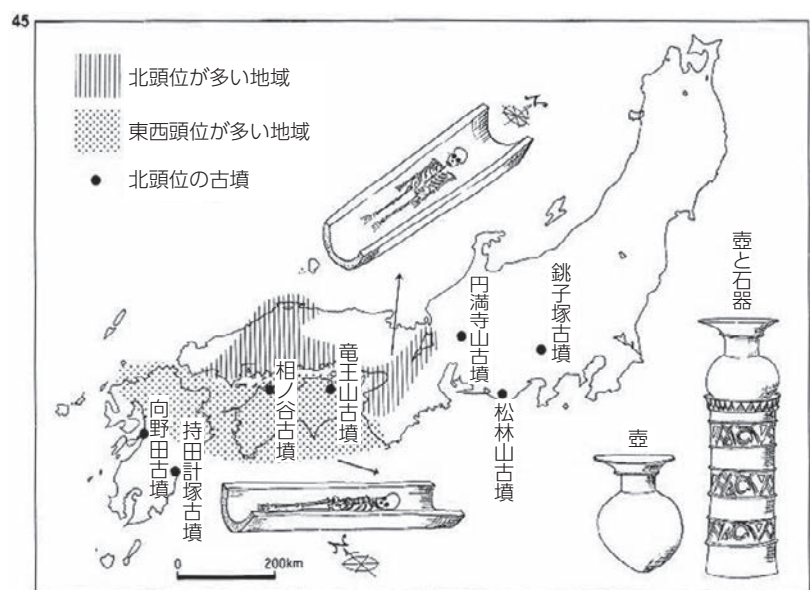


図6：石室の向きに見える特徴(都出編 1989)

しかしながら、受けている影響は四国だけかという点、どうもそうではないらしい。

現地に行かれますとわかりますが、この石室は上が東なのですが、それと同時に墳丘の主軸とほぼ平行します。これも特徴的です。というのは、大阪や奈良というヤマト政権の中核地域では、石室の主軸に平行するか直行するかということを強く意識しています。北を意識しながらも、垂直か平行かということ意識するのです。

古墳を造る時には、古墳が載る尾根の向きとか丘の向きによって、墳丘の主軸がどうしても少し南に振れたり東に振れたりします。そうすると、墳丘の主軸に平行・直交という原理を優先するか、頭位方向を優先するか選択しないといけません。墳丘主軸に平行・直交をより優先するのが大阪と奈良なのです。だから、先ほど北枕と言いましたが、40度くらいずれるものもあります。

四国は違います。四国は、頭位を東あるいは西に向けるため、古墳の主軸をまったく無視します。古墳の主軸に対し石室を斜めに置くことが多いのです。

でも下里古墳の石室は古墳の主軸にきっちり平行していますし、そして頭位を東に向けることもきっちりやっている。両方の欲求を満足させているという点が面白い。

こういうところを見ると、これはどうも四国の影響も受けているけれども、ヤマト政権の中核の影響をかなり受けている気がします。

(3) 副葬品

さらに、副葬品です。報告書を拝見しますと、副葬品は残念ながら盗掘されたものの、一部が回収されて現在に伝わっているということですね。

こうした管玉（くだたま）の類とか、剣の破片が残っています。残っているものだけでも、かなりおもしろい資料です。

写真3は、管玉です。細長い円柱形の玉です。普通の管玉はこれくらいのサイズなのです。スタンダードなサイズ。でも写真4は、たいへん大きい。ずっしりと重い、いわゆる太型の管玉と言われるものです。



写真3：下里古墳出土品（管玉）



写真4：下里古墳出土品（太型管玉）

この太型の管玉はかなり珍しいものです。太型管玉というのは、前期の前半にはありません。前期の中頃から後半を中心に出てきます。そうすると、この古墳は前期でも後半に近いということを示します。先ほど、葺石から考えると前期でも後半だという話をしました。これもやはり、前期の後半だということを示しています。

さらにこの太型の管玉は、この古墳では見つかりませんが、石釧（いしくしろ）と言われる、緑の石でできた腕輪と一緒に出ることがよく知られています。その緑色の石でつくった腕輪というのは、ヤマト政権が各地の首長に配布した宝飾品だと言われている。それとセットになって出てくるのがよくあるのが、この太型の管玉です。ヤマト政権の関連を深くうかがわせる資料ですね。

もう1つ面白い資料があって、謎の管玉のような、非常に太い円柱状の、太型管玉よりもさらに太い円柱状の石製品（せきせいひん）があります（写真5）。これは一説では、玉杖（ぎょくじょう）ではないかと言われています。

写真6のように、玉杖とは、長さがおおよそ40センチで手に持って権威を示す目的で使われます。

「玉（ぎょく）」というくらいですから、宝石の石ですね。碧玉（へきぎょく）とか、碧玉がない場合にはグリーンタフといって少し質の落ちる緑色の石を使って作ります。鉄の芯があって、その芯の周りに太い管玉のようなものと、把手のパーツ、それから「とん」といって一番下の部分が作り出される。権威の象徴が玉杖ということになります。

ちなみに、写真6が出てきた古墳は桜井茶臼山古墳です。全長200メートルあります。大和の東南部にあって、ヤマト政権の中核地にある古墳です。数年前に再発掘されて、石室の中もよくわかっています。

下里古墳から見つかったこの円柱状



写真5：下里古墳出土品（円柱状石製品）



写真6：玉杖（茶臼山古墳出土品）
（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2000）

の資料が、玉杖、つまり杖のどこかのパーツではないかという説と、違うのではないかという説があります。はっきりとは決め切れていません。スライドにクエスチョンをつけてあるのはそのためです。下里の場合は「玉杖」の他のパーツに相当する石製品や部品が見当たらずに断言できないのです。だから「本当に玉杖か？」という気もします。その一方で、直径5センチくらいあるこういう石製の円柱状のものが玉杖以外に考えられるかという、考えにくいという気もします。だから、玉杖の可能性もあるが断言できないというところなのです。

でもこれが玉杖だとすると、やはり重要です。大王陵級の古墳が持っているようなものを持っているということですから、ヤマト政権との関係を考えざるを得ないだろうということになります。

下里古墳のこれまでの調査成果から考えますと、葺石のあり方、それから太型管玉や先ほど土器も見せていただきましたが、土器などから見ると、前期の後半に位置する古墳ではないかと考えられるということです。4世紀の中頃から後葉の古墳だろうと考えることができます。

(4) まとめ

葺石はかなり典型的な葺石のあり方をしていて、ヤマト政権との関係を示しそうな感じがする。太型管玉、そして太い円柱状のものが玉杖のパーツだとすると、やはりヤマト政権との関係を示す可能性がある。ただ石室は、東枕に向けているというのは、四国と関係を有する。

もともと紀伊は、奈良時代になりますと、南海道（なんかいどう）に所属をします。四国と同じ地域の中に紀伊は含まれます。古代に四国と紀伊の関係が強かったことはこのことから考えることができます。

なお、先ほど死者を北枕にするか東枕にするかということを取り上げましたが、これは2つとも中国の思想に関係するだろうと言われています。

中国の書物の中には、「生者（せいじゃ）南面、死者北面」という記述があって、「死者の頭は北の方に向けます」というような記載があります。ですから、ヤマト政権の王や首長が石室を北の方に向けるとするのは、中国の思想が入っています。そして、東西方向というのも近年注目されてきて、その少し前、中国でも古い思想の中に、東西方向を重視する時期があるので、東のほうに頭を向けるのもそういう中国の思想が背景にあるのだと言われ始めました。

この話をすると、北枕ですから、「それは仏教の影響ですか」とよく質問を受けます。仏教が入ってくるのは538年以降です。この時期に仏教は来ていませんので、仏教の影響ではありません。むしろ中国の思想の影響ということです。

Ⅲ. 下里古墳がなぜ築造されたのか

(1) 海辺の古墳

次の課題は、下里古墳がどうして4世紀中頃から後葉の時期に那智勝浦に造られたのかということです。ここはなかなか難しい問題なのですけれども、私の説をご紹介しますと思います。

写真1の五色塚古墳を、もう一度見てみましょう。これは4世紀後半の古墳で下里古墳と近い時期の古墳です。図に見える海は瀬戸内海です。神戸市の西端にあって、淡路島が近くに見えます。九州から大阪へくる船、あるいは大阪から九州、あるいはそこから抜けて韓半島、それから中国に行く船というのは、ここを通るわけです。その海からすぐ見える地点に、この古墳はあります。海がすぐ近いわけです。

先ほど、葺石があって、シンメトリーな形で、緑色ではなくて白く光って見える小山のような存在と申しました。フェリーから頑張って探してみますと見ることができます。海から見えることをかなり意識しています。

下里古墳も、非常に海に近いところにあります。現地に行くと、後円部から南の方を見ますと、海が見えます。おそらく海上から下里古墳も、白く石が光って見えていたことでしょう。しかも、同じような時期であることが面白い。

類似する古墳は、同じような時期にほかにもあるのです。その1つが、京都・奈良・大阪を越えた反対側の、日本海側にもあります。丹後です。丹後の三大古墳と呼ばれるもののうちの2つ、網野銚子山という古墳ですね。この古墳です（写真7）。



写真7：網野銚子山古墳（大阪府立弥生文化博物館 2002）

この古墳も、規模はかなり大きな古墳で、190メートルあります。京都府の網野町というところにあります。海と至近の距離にあります。同じ丹後の丹後町には、神明山古墳があります。これも190メートルです。海に近いところに200メートル近い古墳が造られるのですね。

200メートル級の古墳というのは、時と場合によれば大王陵クラスです。この時代の大王陵クラスは、300メートルクラスの古墳があるので、それに比べると3分の2、あるいは半分くらいの大きさしかないのです。小さいといえるのですけれども、大王の力が小さくなった時には大王陵格の古墳なのです。

そうした古墳が、それまでほとんど前方後円墳が造られない地域にある。前方後円墳がほとんどない地域だったのに、京都府の丹後には200メートル近い古墳が、同じような時期に出てくるのです。

(2) ヤマト政権の拡張期

それと同時に、大きな古墳が造られる範囲が広がるのも、4世紀後半のこの時期なのです。唐仁大塚（とうじんおおつか）古墳はその代表例です。鹿児島の大隅半島にあります。154メートルある前方後円墳なのです。鹿児島に150メートル、100メートルを超える前方後円墳がこの時期にできているのです。それまでにも前方後円墳はあるのですけれども、40メートルくらいの古墳が基本なのです。それを凌駕する古墳が、同じような時期に出てくるわけです。

あるいは、反対の東北です。宮城県にある雷神山古墳も168メートルあります。150メートルを超える前方後円墳が宮城県に出てくるのです。それまで宮城県には、100メートルを超える前方後円墳はない。これも4世紀後半なのです。

元に戻ります。五色塚古墳が190メートルで、瀬戸内海の至近のところに出てきます。すなわち4世紀後半という時期は、海というものをかなり意識した古墳が出てきます。そして、ヤマト政権の拡張期にあたることを示しています。かなり規模の大きな150メートルを超える古墳が鹿児島にも出るし、宮城県にも出てくるのです。

これは私だけが言っているのではなくて、京都橘大学の一瀬（いちのせ）和夫さんなども、最近のご著書で書かれています（一瀬2016）。ヤマト政権の拡張期にあたり、そして海を意識した位置に古墳を造っているということなのです。

(3) 下里古墳の立地と意義

下里古墳は、規模こそ小さいです。しかしながら、それまで那智勝浦どころか、紀中・紀南にほとんど古墳がない、しかも前方後円墳がないというところに、下里古墳ができてくる。上の現象と同時に起こっている。連動している様子が見て取れる。しかも海が見えるということも共通する古墳がある。

まとめますと、古墳時代前期後半は前方後円墳の分布拡大期に当たる。そして、海に面

して古墳が築造されることが多いのです。ヤマト政権の勢力拡大期に当たり、そのときに海洋が重視されているということです。

ではなぜ海洋が意識されるようになるのかというと、私は、1つの可能性として、ここからは推測も混じってくるのですが、当時の外交問題にかなり影響されていると考えます。

古墳時代、韓半島は三国時代と呼ばれます。高句麗、新羅、百済があって、その南に挟まれて伽耶の地域が小さくあります。高句麗、百済、新羅がしのぎを削っている、その間で伽耶が非常に苦労しているという時期が三国時代なのです。

その中で一番強力なのは高句麗です。今の北朝鮮にあたります。高句麗は西に中国王朝、北方には北方民族がいるわけで、それらの地域から西から北から圧力を受けるわけです。高句麗はそうした圧力を避け、南下政策をとるのです。高句麗による南下政策は当然ながら百済や新羅を圧迫します。

日本列島のヤマト政権にとっても、「隣の事だから関係ない」というわけでは決してなくて、やはり国防に意識を尖らせていくことになる。今とよく似ている感じがいたしますけれども。

しかもその頃に日本は、鉄というものを自前で生産できません。鉄の原料はすべて韓半島から輸入していると考えられています。鉄はその当時の貴重な資源ですから、いま石油を止められたら日本列島が困るように、鉄を止められると日本列島では鉄が枯渇して、そのときの生産がすべてストップするという状況に陥る。できれば自分の友好国である伽耶、あるいは百済などと友好関係を結んで、鉄の材料、あるいは鉄を作る技術の移入を、ヤマト政権としては図りたいのです。

しかし高句麗が南下してくると、そういった資源に対するアプローチ、資源を確保することが困難になります。百済はちょうどそのときに、日本と国交を結ぼうとして努力を始めます。

百済は伽耶の1つである卓淳国(たくじゅんこく)という国に対して、「倭から人が来たら教えるように」ということをわざわざ言いに行ったりしています。三国史記という本にそういうことが書いてある。

それで、どうやら369年前後にヤマト政権と百済は同盟関係を結んだらしいということもわかっているのです。その有力な証拠が、この七支刀(しちしとう)です(写真8)。どこかで写真を見たことが



写真8：七支刀
(東京国立博物館 2020)

あると思います。奈良県の石上（いそのかみ）神宮に納められた神宝ですね。七支刀は、7本の枝が出ている太刀なので「七枝刀（ななつさやのたち）」というふうに言うわけです。

この鉄剣の、七支刀の表と裏には、象嵌（ぞうがん）といって文字が書いてありました。その文字を読むと、太和元年（西暦369年）と考えられています。「百済の世子（せいし）が倭王のためにこの刀を作って贈る」ということが書かれています。百済の世子というのは、今でいうところの皇太子、世継ぎですね。百済の今でいう皇太子が倭の王、日本の王のために、この刀を作って贈るということが、この刀には書かれてある。刀を贈るのであるから、それは軍事同盟の証だろうと言われてしているわけです。

実際、日本書紀などを見ますと、日本の軍隊が海を越えて韓半島に渡ったことが記されています。あるいは、好太王（こうたいおう）の碑文です。これは、高句麗の広開土王（こうかいどおう、好太王）の実績を書いた碑文があることが有名ですが、そこには、倭の兵、日本の兵がやってきて、百済や新羅を臣民にしたことが書いてある。日本列島の兵がやってきて、韓半島の国々を従えたので、高句麗の王である好太王が「軍隊を送って蹴散らした」ということが書かれています。

数え方によりますけれども、好太王の碑文には「倭」という文字が、その1か所だけではなくて、11回出てくるそうです。どうしてそうなっているかということ、石碑は好太王を顕彰するために建立されるので、王様を引き立てるためには悪役が要るのです。ヒーローが要ります。それが倭だったのです。日本列島からやってきた兵をやっつけたので「この王様は偉い人だ」と書くわけです。向こうには向こうの事情があるので、そう書くのは当然です。

それはあながち嘘とも言えないわけです。日本列島から兵がやってきたことを、かなり誇張して書いているかもわからないけれども、おそらく日本列島から兵がやってきて、七支刀の銘文から見ると百済などと同盟して、高句麗と戦っている可能性は充分にある。日本書紀では高句麗でなく新羅と戦ったことになってますけれども、韓半島に兵を送ったことが書いてありますので、どうもこの時期日本列島の兵がヤマト政権から派遣されて韓半島に行っている可能性があると言われてしています。いろいろな証拠からそれがわかります。

それからこのあと、380年から90年以降になりますと、日本の甲冑とか弓矢の矢尻（やじり）が朝鮮式に変わっていきます。どうも向こうの軍備から触発をされて、韓半島式の軍備を移入してるので、この時期に韓半島と日本との間に軍事的な関わりがあったことはほぼ間違いないと言われてしています。

兵を韓半島に送るためには海を渡らないといけない。海を渡るには、海に長けている人がいないと行けないわけです。あるいは、逆に攻められるときには、海洋を防衛していかないとけない。ですので、ヤマト政権の目が海洋に向くのは当然といえましょう。あるいは外国と戦うときには、国内を安定させておかないといけません。海外と戦っていると

きに国内で内乱を起こされたりはならないから。国内を安定させないと戦争に負けてしまいます。だからこそ、各地の首長と同盟関係を結んでおいて、できれば海に関わる集団と連携することが望まれます。そして韓半島との外交関係に対処したのだらうと考えられるのです。

(4) まとめ

下里古墳はどうして那智勝浦に造られたのか。ヤマト政権の拡張期にあたり、ヤマト政権の関心が海洋に向いているからだと考えられます。おそらくヤマト政権としても、海洋に長けている人と結びつきたいというところで、和歌山の地域の人々と結ぼうとしたと考えられます。先ほど後（うしろ）先生にこの地域をご案内いただきましたけれども、太田川流域というのは非常に沖積地が広く、割と豊かなところだとお伺いしました。

ヤマト政権としても、できるだけ有力なところと結びつきたい。同じ和歌山でもできるだけ有力なところと結びつこうとする。そうしたことを背景に、和歌山の首長と、ヤマト政権が連合を結んだのではないかと考える。そして前方後円墳が造られるということではないか、と思うのです。

IV 田辺市磯間岩陰遺跡からみえるもの

もう1つ、最後のテーマですが、田辺市のお話をします。下里古墳と関係のないことではありません。

田辺市に磯間岩陰遺跡という遺跡があります（図7）。これも国史跡になっていて、田

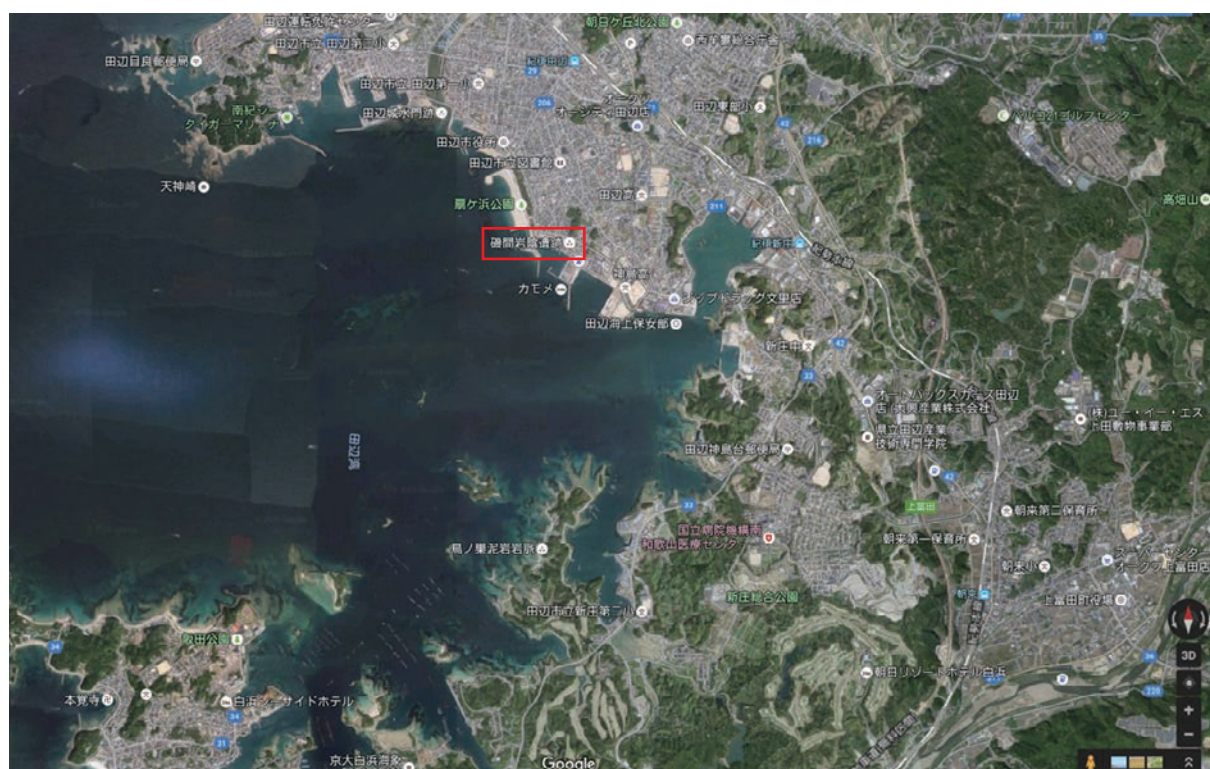
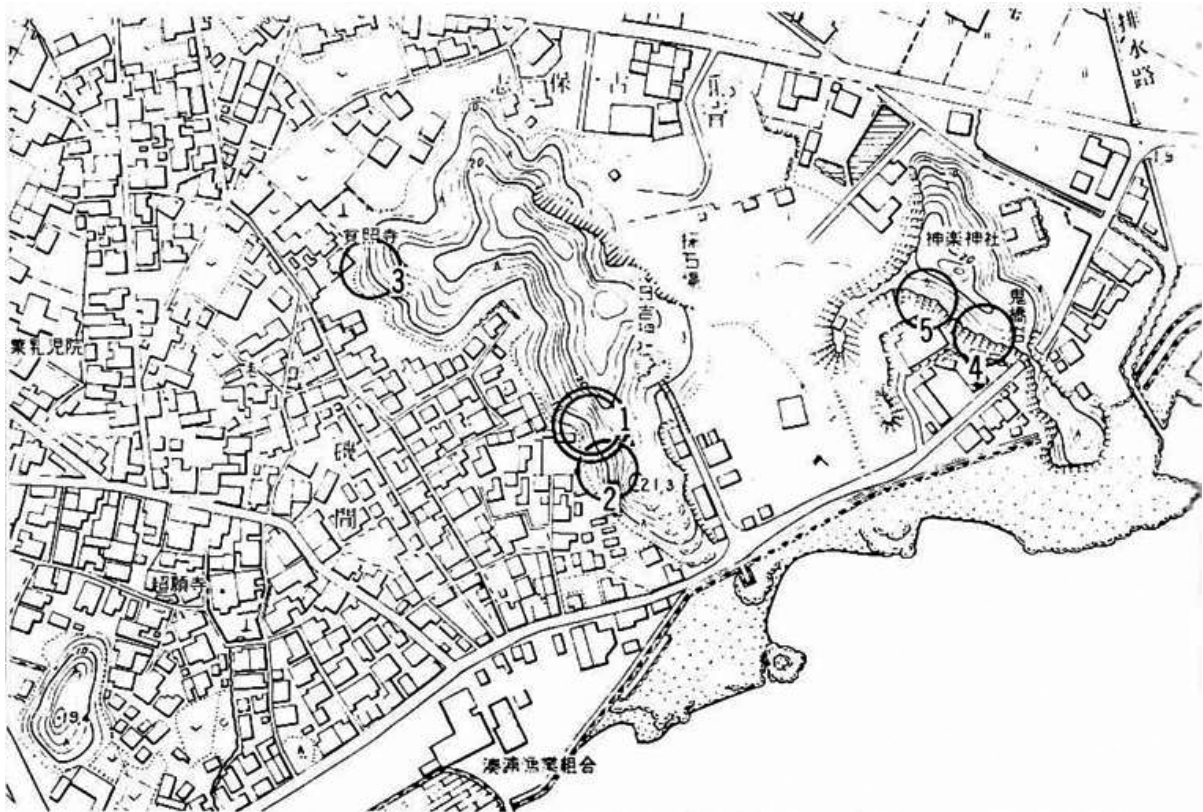


図7：磯間岩陰遺跡の位置（田辺市磯間）（Google マップ 2018）

辺湾の海のすぐそばにある遺跡です。田辺湾があって、当時の海はもっと内側に入っていたでしょうから、海際にある遺跡といえます（図8）。現地に行きますと、岩棚が見えます。岩棚を埋葬施設にしている遺跡です。下里古墳のようにマウンドがあるわけではありません。単にこの岩陰の下に穴を掘って埋葬施設を造るという遺跡ですね（写真9・10）。



磯間岩陰遺跡と周辺の遺跡の岩陰 ①磯間岩陰遺跡 ②磯間岩陰 B 遺跡 ③覚照寺裏岩陰 ④神子浜遺跡 ⑤神楽神社下岩陰

図8：磯間岩陰遺跡と周辺の遺跡と岩陰（堅田 1970）

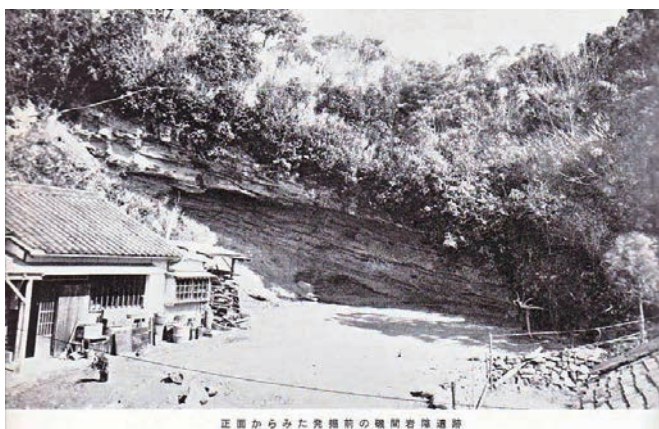


写真9：発掘前の磯間岩陰遺跡（堅田 1970）



写真10：現在の磯間岩陰遺跡

埋葬施設は8つ見ついています（図9）。砂浜の遺跡なので、人骨が良い状態で保存されてきました（図10）。時期は下里古墳よりも100年後です。5世紀後半から6世紀まで墓域として使用されます。下里古墳より100年くらい後の時期です。同じ時期ではありません。でもこの100年後というのも重要なのです。マウンドもないところに穴を掘って、石棺（せっかん）を作ります。私たちは石室と呼んでいます。石で周りを囲っただけの簡単な埋葬施設です。



図9：磯間岩陰遺跡の遺構配置とその変遷
(田中 2019)

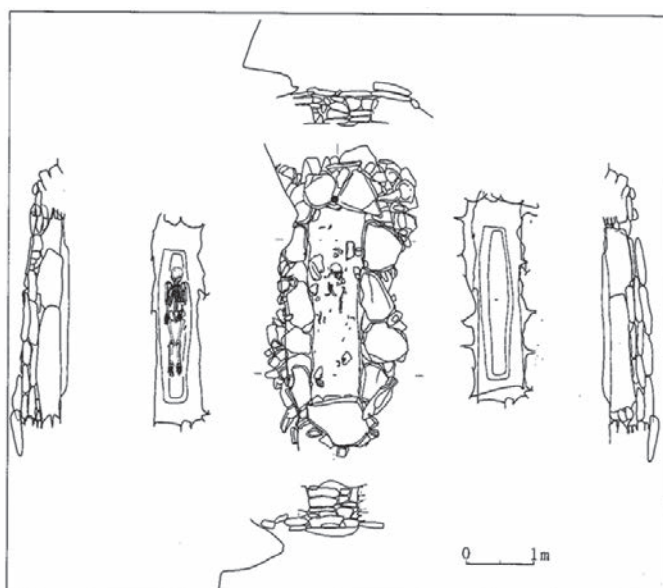
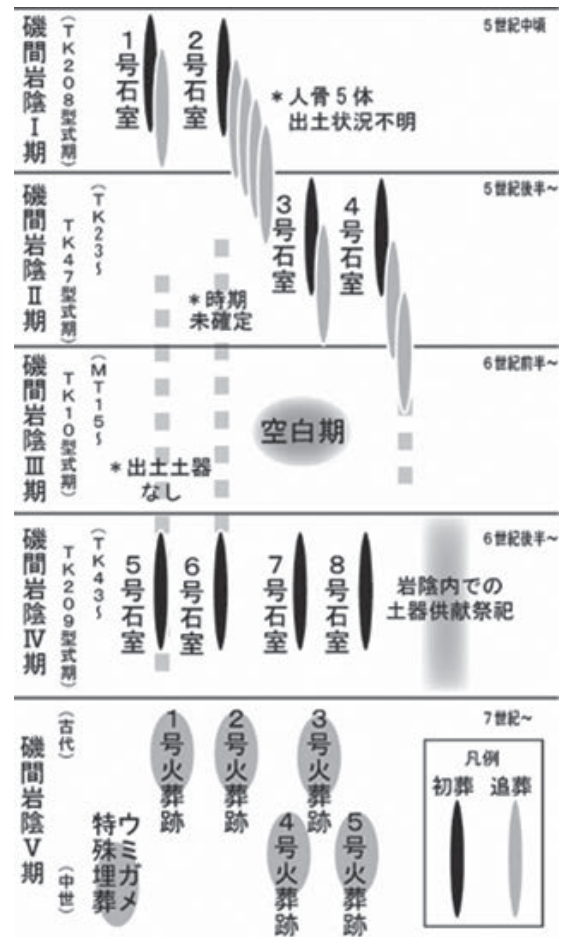


図10：1号墳の埋葬の様子（堅田 1994）

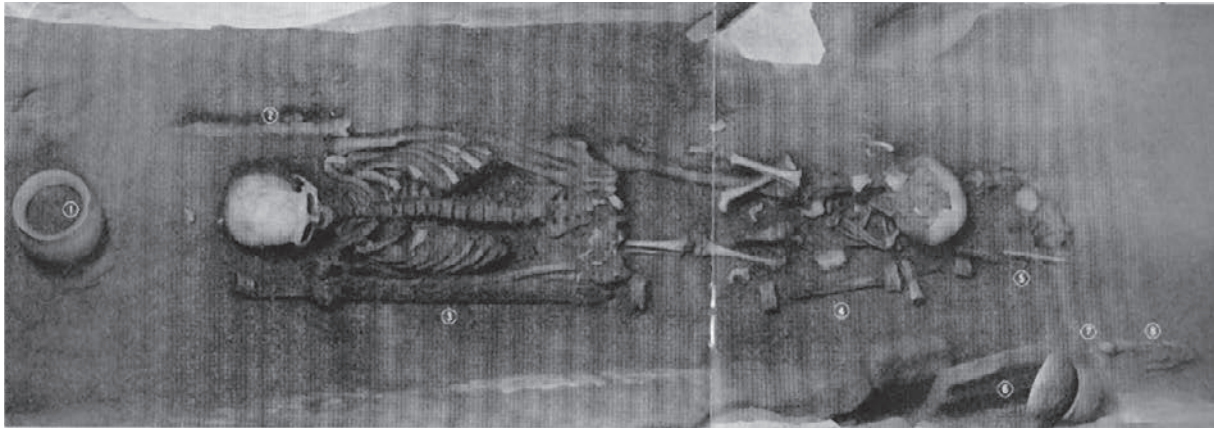


写真 11：第 1 号石室の埋葬の様子（堅田 1970）

写真 11 は、その第 1 号石室と言われる、5 世紀後半の埋葬の様子です。きれいに人骨も残っていて、中年の男の人と 3 歳くらいの子どもの骨です。

副葬品がたいへんたくさん入っているのですが、まずこのお墓で注目したいのは、石室内に甕（かめ）が置かれています。土師器（はじき）の甕です。土師器の埴（わん）もあります。日本のお墓で、埋葬施設の中に土器を入れるというのは、数は多くありません。6 世紀になると事例が増えていくのですが、5 世紀後半だと類例が少ないのです。

これはもともと韓半島の影響なのです。埋葬施設の中に土器を入れるというのは、韓半島の風習です。

特に第 1 号と第 2 号石室から副葬品がたくさん出ています。先ほど石室に入っていますといった甕ですね。埋葬施設に甕が入っているところは珍しいのですという話をしました。それ以外に、立派な剣をもっていて、剣につける鹿角（ろっかく）、シカの角で作った飾りをもっています。これもなかなか立派なものです。これは重要文化財です。

この被葬者の特徴を示すのに、鉄の大型の釣針と、同じく釣針ですが鹿角製、シカの角で作った釣針が出ています。この釣針が第 2 号石室からも出ていますので、おそらくこの人たちは漁労民です。漁師さんだったと思われます。

剣装具ですね、剣につける装具、飾りがあります。非常に精巧に作られています。シカの角を削り出して、非常に精巧に作られている。直弧文（ちょっこもん）という、直線と円弧を組み合わせた非常にきめ細やかな文様が彫り込まれています。田辺市の歴史民俗資料館に時々展示していますので、行かれましたらご覧いただければと思います。なかなかの優品です。おそらくこれは地元では作れないだろうと言われています。技術がないというわけではなく、その文様には意味があるので、文様の情報は和のほうからきている情報だろうと考えられています。

釣針も重要です。鹿角製の釣針と鉄の釣針が出土しています。10 センチくらいありま

すから、非常に大型です。大型の魚、カツオ用かと考えられています。また刀子把（とうすつか）などもあります。

私の後輩で鈴木一有（すずきかずなお）が書いた論文がありまして、実は全く同じ釣針が、伊豆と、それから房総半島で見つかっています。また先ほど岩陰墓と言いましたが、ああいう海で浸食された岩壁に墓を作るというところも、実は伊豆のほうと房総半島にあって、非常に関連が深いとされています。

何が言いたいかという、どうも磯間に住んでいた人たちは、おそらく海洋ルートを使って、伊豆と房総の人たちと交流していた可能性があるということです。

先ほどの鹿角剣装具はヤマト政権との関連を示し、非常に珍しいものです。下里古墳のように大きな古墳をつくってない人たちが、なぜヤマト政権と関係を持つ装具を持つのか。あるいは、韓半島の風習がいち早く伝わっています。5世紀後半に土器を棺（かん）の中に入れるというのは珍しい事例です。

埋葬された人々はおそらく地元の人です。地元の田辺の人なのです。田辺の人なのに、韓半島の影響をいち早く受けている。ヤマト政権のほうからの影響も受けている。なぜでしょう。

まとめますと、磯間岩陰遺跡の被葬者が漁労民としての性格をもつことは、副葬品から間違いないと考えられます。それから、ヤマト政権との関わりをもつことも、鹿角製品からも言えます。韓半島由来の風習ももっているのです。

（2）海外情勢と磯間岩陰遺跡

どうしてそのようなことがあるかという、これもやはり、ヤマト政権の戦略と結びつく可能性があると考えられます。

先ほど磯間岩陰遺跡は、中期後半、西暦460年くらいから造られ始めるという話をいたしました。その頃は「雄略（ゆうりゃく）朝期」、雄略天皇の時代だと言われています。

雄略天皇というのは、古代の大王の中でも革新的な大王と言われています。自分が大王になるときに、自分の兄弟やいとこなど5人の王子を抹殺して、自分の専制権力を固めています。5人の王族を粛清するのです。自分の独裁体制を築くのです。

独裁体制を築くと同時に、大和の有力豪族である葛城氏の一派を滅亡させます。あるいは、岡山にいる吉備氏の一派、吉備氏はいくつも枝族に分かれるのですが、そのうちの一派を滅ぼします。そういうことが日本書紀に書かれています。

図11をみますと、古墳時代中期後半、5世紀後半以降に、岡山では大型の前方後円墳がパタッと途絶えることがわかります。これは雄略によって吉備が圧力を受けたと理解されています。

吉備は、ヤマト政権成立時からずっとヤマト政権に協力している地域で、場所は備前であったり備中であつたりと違えながらも、ずっと大型の前方後円墳を造り続けていました。

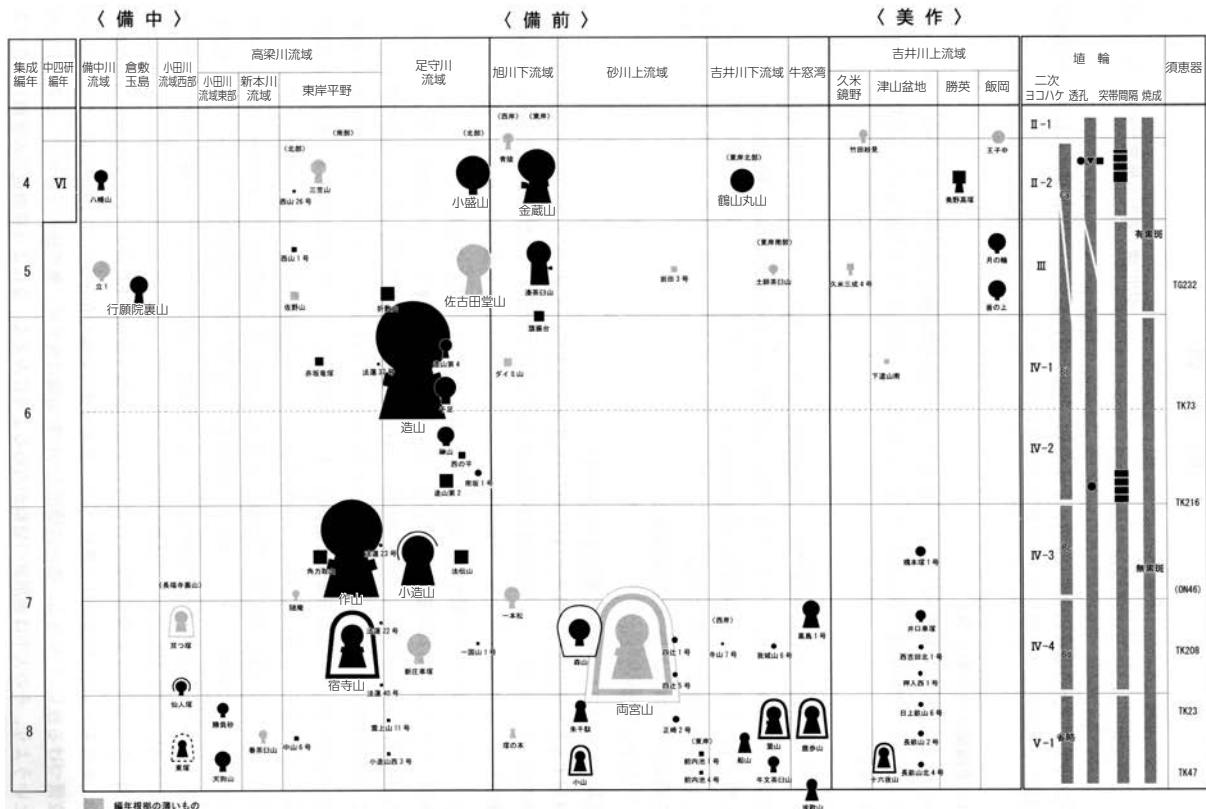


図 11：岡山県における大型前方後円墳の変遷（安川 2018）

あるいはヤマト政権から与えられたという鏡をたくさん持ち続けるような地域なのです。けれども、中期後半になると、圧力を受けたようで、古墳がピタッとなくなるわけです。このように雄略というのは、自分とライバルになりそうな者を滅ぼし、専制的な政治体制をつくらうとした人です。

それと同時に、支配体制を強化していきます。「人制（ひとせい）」と呼ばれる制度をつくっています。人制というのは、例えば、「典曹人（てんそうじん）」とか「杖刀人（じょうとうじん）」とかいう言葉が金石文（きんせきぶん）に書かれていたり、あるいは日本書紀や古事記に「鳥飼人（とりかいびと）」という記載があります。人制とは、原初的官僚組織であろうと言われています。杖刀人は武官、典曹人は経済官僚とされます。そのような原初的官僚制度を作って、国家としての制度を整えたと言われています。

もう1つ、この雄略が特徴的なのは、やはり韓半島と大陸との関係です。雄略天皇は「倭王・武（わおうぶ）」に相当します。倭の五王、讃・珍・濟・興・武を聞いたことがあると思います、中国の南朝に朝貢（ちょうこう）して、遣いを送っていた王が、5世紀に5人いると言われて、それが讃・珍・濟・興・武だと、「宋書（そうじょ）」という中国の本に書かれているわけですが、その最後が武です。雄略はその武に相当すると言われています。

雄略の本当の名前はワカタケル。タケルというのは「武」という字が当てられ、その字にとって中国風の名前とし、中国の皇帝に遣いを送っていると言われています。

その宋の皇帝への上表文（じょうひょうぶん）に、「句麗無道（くりむどう）」という記述があります。句麗とは高句麗のことで、すなわち「高句麗無道」、高句麗に道無し、と書いてある。道徳がないというのです。「その高句麗を征伐するために、中国の宋の力を借りたい」ということが、その上表文には書いてあるのです。

どうしてそのようなことを書くのでしょうか。実はこのころ、高句麗が南下政策を強め、ヤマト政権と友好関係にある百済が圧迫されています。とくに西暦475年の頃に、百済は高句麗によって滅ぼされます。

百済の都は漢城と言って、今のソウルにありました。漢城を巡って、百済と高句麗は争いをする。百済にとって漢城は自分の都ですから、都を落とされたら国が滅びます。475年に高句麗が南下してきて、その漢城を高句麗に奪取されてしまうという事件が起こった。そのときに、百済の王はつかまって首を切られてしまう。都を落とされるわ、王は殺されるわということで、もう百済は壊滅状態になるのです。

その残党が、南に下って熊津（ゆうしん）、くまなりという地域に新たに都を造って百済を再興するのですが、都を奪取されて王を殺されるということで、百済は475年に一時滅亡するのです。

最初に申しましたとおり、倭の政権の基本戦略は、伽耶あるいは百済と連合して、新羅と高句麗と対抗するというものでした。そのときの同盟国の1つが滅ぼされたのです。倭の政権にとっては危機的状況です。

だからこそ、雄略は軍事的な強化を図る必要がある。専制的体制を強化し、軍事的な強化を図ったのです。そして統治組織として、人制という統治組織で内政として統治の強化を図って、そして対高句麗の準備を進めていく。外交的に有利な条件を整えようとして、宋にも遣いを送るわけです。

そのときに、海洋に彼が目するのは当然です。海を渡らないと韓半島には行けませんし、あるいは中国にも遣いを送ることができません。だから、海に詳しいような氏族やその集団と、連合関係を結ぼうとに考えたのだと思います。磯間岩陰遺跡はその一つだったのではないのでしょうか。

そのように考えますと、磯間岩陰遺跡が漁労民としての性格をもつということと、韓半島由来の風習をもつということ、そしてヤマト政権と関係を持っていることも理解できます。韓半島への往来に関わっていたことが可能性として考えられましょう。

V. おわりに

磯間岩陰遺跡は下里古墳から 100 年後の遺跡ですが、両者に共通するのはヤマト政権が韓半島との外交に目を向けている、海洋というものに関心を向けているときに、両遺跡が作られていると言うことです。2つを連動させて考えると、下里古墳はヤマト政権の意識が海洋に向いている時に築造されていることが、磯間から考えても理解できることなのではないかと思うわけです。

4 世紀後半にヤマト政権が百済と国交を樹立している。海洋進出・防衛に協力するような形でヤマト政権と那智勝浦の勢力が関係を結ぶ中で、下里古墳という前方後円墳ができたのではないかという趣旨のお話をいたしました。

ちょうど 3 時前になりました。お聞き苦しい点があったかもしれませんが、お許してください。どうもありがとうございました。

【司会】 清家様、どうもありがとうございました。せっかくの機会ですので、質問をお受けしたいと思うのですが、先生はこのあとまた岡山に戻っての業務もございますので、3 時 5 分くらいで切らせていただきたいと思います。申し訳ございません。それでは質問のある方は挙手をお願いします。

【質問者 1】 ありがとうございました。熊野地方の不思議の 1 つに、下里を除いてめぼしい古墳がほとんどないということ。各地に豪族はいたでしょうし、ヤマト王権ともそれなりの交流もあったと思われませんが、なぜ下里以外に古墳があまり見つからないのか、見当たらないのかということについて、先生のお考えをお聞きしたいです。

【清家】 難しい質問です。ですが、私は高知に 12 年いたのですが、実は高知に前方後円墳は 1 基もないのですね。1 基もないどころか、中期古墳や前期古墳もほとんどない地域なのです。

そのときに、ヤマト政権の主流な交通路は瀬戸内だと言われていて、瀬戸内の海岸沿いに古墳がたくさんあるのです。ですから、そっこのほうにヤマト政権の目が向いているのは間違いないだろうということだと思います。

それ以外に必要になっていったときに、その中でもおそらく熊野の地域の中で一番有力な地域と考えるここを選択されて、同盟関係を結ぶんじゃないかということが想定されますが、これはまだ想像の域を出るところではないので、今後他の遺跡とかを比較しながら研究を進めたいと思います。

【質問者 1】 下里のそこらあたりというのですか。あそこの上のところに、砦とか何かが

けっこう残っているのです、山の上に。その下里の古墳の上のほうに。それで、下里神社の元というのは、やはりその上にあったというか。そこは戦略上かなり抑えるポイントなので、そういうような戦略的なことはなかったかなという。

【清家】 それはあるかもしれませんが……、あるかもしれません。お城はもう少し時代が新しい、中世くらいのものだと思うのでわかりませんが、そういうところに古墳があるというのは、戦略上重要というのはある可能性があります。

先ほども言いましたが、海から見えるというのはたいへん重要なところですよ。敵に対しても、ここは政権の領域だと示すこともあり得ますし、あるいは交通路の拠点になるようなところに古墳を造るという説もありますから、おっしゃるような最前線としての機能を果たしている可能性は充分にあると思います。

【質問者2】 磯間の遺跡の話をしていただいたのですけれども、ここから磯間は80キロか90キロだと思うのですが、その中間あたりのすさみの海岸段丘の上、100メートルもないかな、そこに円墳（上ミ山古墳）があるわけですが、そことの関係というのはどんなものがあるのか。もしよかったら少しでも聞かせていただけたら。

【清家】 すさみの上ミ山古墳は少し時期が新しくなります。

実は話を省いているのですが、今日の話の後にもう少し続きがあって、6世紀後半から7世紀の前半という時期に、瀬戸内から大阪湾を通過して太平洋沿岸に似たような石室がポツポツと広がるという、そういう時期が実はあるのです。それはおそらく蘇我氏とかが隆盛するときだ、という論文を私が書いたのです。そういう時期があって、蘇我氏が新たな交通ルートを作ろうとして、そういう地域と手を結んだ可能性があるという論文を書いたことがあります。それでよろしいでしょうか。

だから、6世紀後半から7世紀の段階にも、やはり紀伊の南側をやはり自分の交通ルートとして利用しようという動きが出てきているということです。だから同じような流れだと思います。蘇我氏もやはり韓半島とのつながりが強い氏族ですので、そういうことを考えていると思うのです。

【参考文献】

- 一瀬和夫 2018『百舌鳥・古市古墳群 東アジアのなかの巨大古墳群』同成社、東京
- 小野昭ほか編 1992『図解・日本の人類遺跡』東京大学出版会、東京
- 大阪府立弥生文化博物館 2002『青いガラスの燦めき』
- 堅田直 1970『田辺市磯間岩陰遺跡調査概要』帝塚山大学考古学研究室、奈良
- 堅田直 1994「磯間岩陰遺跡」『田辺市史』第4巻資料編I 田辺市、和歌山
- 神戸市教育委員会 2006『史跡五色塚古墳 小壺古墳 発掘調査・復元整備報告書』
- 清家章 2018『埋葬からみた古墳時代 女性・親族・王権』吉川弘文館、東京
- 田中元浩 2019「紀伊半島における海辺の集落と墓制」『紀伊考古学研究会第22回大会 海辺における集落と墓制の実像－磯間岩陰遺跡と西庄遺跡－ 発表要旨集』紀伊考古学研究会、和歌山：pp. 8-17
- 都出比呂志編 1989『古墳時代の王と民衆』古代史復元6 講談社、東京
- 都出比呂志 1991「日本古代の国家形成論序説」『日本史研究』342号 日本史研究会、東京：pp.5-39
- 那智勝浦町教育委員会 1975『下里古墳発掘調査報告（第1次）』
- 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 2000『「権威の象徴」－古墳時代の威儀具－』
- 安川満 2018「岡山県」『中期古墳研究の現状と課題Ⅱ』中四国前方後円墳研究会、岡山：pp.55-75

役員・理事 (50 音順)

(創立 20 周年記念年度)

会 長 後 誠 介

副 会 長 松 本 豊
山 縣 弘 明

理 事 岡 本 芽 委
大 林 幸 子
串 文 武
荘 司 静 代
白 水 洋 子
田 中 喜 世
西 孝 子
西 川 友 華
築 筑 充 代
牧 邦 子
南 正 枝
山 縣 弘 明
山 本 喜 代 美
渡 瀬 順 子

監 事 大 林 幸 子
西 川 友 華

庶務会計 河 野 健 作

写真提供者 (50 音順)

大阪府立弥生文化博物館

神戸市教育委員会

田辺市教育委員会

東京国立博物館

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

【編集後記】

那智勝浦町文化協会が20周年を迎え記念講演会が行われたことを契機とし、文化協会の益々の発展と後世にこの様な事業があったことを伝えるべく冊子に出来上がったことと思います。録音の文章化や編集の為に時間を費やしてしまい、発行が遅れましたが事業の記録とすることが出来ました。当会員のみならず是非とも多くの方に触れて頂きたい一冊となっております。

末尾になりましたが、編集に協力して頂きました皆様には心より感謝を申し上げます。

(事務局)

那智勝浦町文化協会創立20周年記念文化講演会記念誌

「下里古墳からわかること」

発行日 令和2年10月30日

編集・発行 那智勝浦町文化協会（那智勝浦町教育委員会内）

〒649-5338 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町二河75

印刷・製本 久保印刷

〒649-5335 和歌山県東牟婁郡那智勝浦町築地8-8-15

